九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

台頭する中国における東アジア共同体論の展開 : 戦略・理論・思想

徐, 涛

https://hdl.handle.net/2324/1789441

出版情報：九州大学, 2016, 博士（比較社会文化）, 論文博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

氏　　名　：徐　涛

論 文 名　：台頭する中国における東アジア共同体論の展開―戦略・理論・思想

区　　分　：乙

論　文　内　容　の　要　旨

30 年以上にわたって経済成長を続け、19 世紀末に失われた地域超大国の地位に復帰しつつある中国は、「ポスト西洋中心」の地球化時代における東アジアの復興、東アジア地域の平和と新たな秩序の形成に大きな影響を及ぼしている。本論文は、外交戦略、国際関係理論、歴史・思想（現代中国思想）という三つの視座から現代中国の言説空間において展開されている東アジア共同体論／東アジア論を分析し、「政略的ツールとしての東アジア」、「新地域主義に基づく秩序／規範としての東アジア」、「価値・認知の媒介としての東アジア」という三つの東アジア像を浮かび上がらせ、現代中国における立体的な東アジア像の提示に努めた。戦略・理論・思想からなる複合的アプローチをとる本論文は現代中国外交研究、ひいては現代中国研究に一定の貢献をなすものと思われる。

序章では、多元的権力・文明の世界構造が出現しつつある地球化時代における東アジア復興の歴史的な意義に言及し、中国の台頭が東アジアにもたらす広範な影響を確認したうえで、中国の台頭と東アジア地域主義の発展の建設的共生が東アジア地域国際秩序の平和的移行、ひいては東アジアの復興を可能にする最も重要な要因であるという問題意識に言及した。その後、先行研究の大半が 1990 年代後半、とりわけ 2000 年代以降の中国の地域外交戦略に集中しており、中国における立体的な東アジア像が提示できないでいることを踏まえ、本論文の採る戦略・理論・思想からなる複合的アプローチの意義を説明した。

第 1 章では、中国外交の視点から「東アジア」が政治的意味での「地域」として認識されるようになった歴史過程を辿り、20 世紀末以降中国が展開する東アジア地域主義外交を検討した。具体的にはまず現代中国外交における東アジア意識が東アジア地域の国際構造と中国のアイデンティティという二つの要素と密接に関わりながら変容してきたことを、いくつかの時期に分けて考察した。続いて、中国が東アジア地域主義に向き合うようになったプロセスを ASEAN との関係を中心に整理したうえで、ASEAN+3 首脳会議における中国首脳スピーチをはじめとする諸資料を中心に中国が推進する 1997 年以降の東アジア地域主義外交を取り上げた。

第 2 章では、こうした中国の東アジア地域主義外交、東アジア共同体論の戦略的意図を明らかにするために、まず中国を取り巻く国内外状況の急変期であり新地域主義の世界的な興隆期でもある 1980 年代末から、「平和的台頭」「運命共同体」が頻繁に論じられるようになった 2010 年代前半にかけての長いタイムスパンで、中国指導部のブレーンやシンクタンクの展開する東アジア戦略構想／東アジア共同体論を時系列的に追い、米国の「世界帝国化」戦略を意識した地政学的思考に基づく「東アジア経済政治共同体」論（1980 年代末～1990 年代半ば）、大国であることを自覚した台頭戦略としての東アジア戦略／東アジア共同体論（地域主義の戦略的価値を重視する「東アジア一体化戦略」や「東アジア安全共同体論」など）（1990 年代後半～2000 年初頭）、国際秩序の変革と結びついた東アジア地域主義戦略論や東アジア秩序の再構築を目標とする東アジア地域戦略、「アジア

※ 2,000 字程度にまとめること　　（比乙様式３）

運命共同体論」（2009 年以降）といった多彩な東アジア戦略論／東アジア共同体論を取り上げた。続いて、最高指導者および外交実務担当者の言説に注目し、ASEAN＋3 首脳会議における「建前」のスピーチでは見られない中国指導部の考える地域戦略の「本音」（江沢民の総合的な周辺外交の指導思想や習近平の「新アジア主義」的戦略）を分析した。

第 3 章では、中国における東アジア地域主義像を理解するために、中国における地域主義理論の受容と構築を検討した。まず 1990 年代中頃から、中国学者が欧米の地域主義理論を学習しつつ、独自の問題意識から 1980 年代以降の「新地域主義」の展開を積極的に評価してきたことを確認した。続いて、2003 年以降始まった東アジア地域主義理論構築では「地域レジーム」や「リージョナル・ガヴァナンス」の構築、「地域性」に着目するネオリベラル制度論のアプローチと並んで、安全共同体や地域アイデンティティに焦点を当てるコンストラクティヴィズムを応用・発展するものが主流を占めてきたこと、そしてオリジナルな「中国理論」と国際関係理論の「中国学派」を形成する試みとして東アジア地域主義理論の構築を模索する動きも見られたこと、また 2009 年以降、安全保障問題を中心に東アジアにおける緊張が高まったことを背景に、大国関係を重視する「大国コンサート型地域主義」や「複合的地域主義」といったリアリズムの視点が見られるようになったことを論じた。

第 4 章では、歴史・思想の視点から現代中国の思想空間における東アジア論を、「近代化」、「価値・規範」、「思想的課題／思想的媒介」の三つのカテゴリーに分けて考察し、中国の描く自己像と東アジア像の深層に光を当てた。1980 年代以降現れた近代化論の文脈における「東アジア（東亜）」論、1990 年代以降中国現代思想において脱欧米中心主義的世界像の構築が批判的知識人を中心に模索されるなか、思想評論誌『読書』（1996～2010）において確立された「病理分析」を中心とする東アジアの視座、竹内好と魯迅の思想を活かしつつ「主体の在り方」を問い続けてきた孫歌の認識論的東アジアの視座を検討した後、東アジア共通文化としての儒学の再建、「和合哲学」と「東亜意識」の構築、古代東亜「朝貢システム」「華夷秩序」の揚棄、「近代の超克」を意識した新たな東アジア像の構築という複数のアプローチから東アジア／アジア的価値の再構築が模索されていることを検討した。

終章では、外交戦略の視座＝「ツールとしての東アジア」、地域主義理論の視座＝「秩序／規範としての東アジア」、歴史・思想的視座＝「価値・認知媒介としての東アジア」という三つの東アジア像を確認すると同時に、中国の東アジア共同体論／東アジア論における外交戦略・国際関係理論・歴史思想の交差と複雑な相互作用を指摘した。そして 21 世紀の東アジア的規範・価値を構築する際には、東アジア自身の歴史と視点を重視すると同時に「中国中心主義」と「アメリカ中心主義」からの脱却を自覚する必要があると述べた。また今後の課題として、本論文の採った三つの視座による研究のさらなる発展と、日本と比較する視点の重要性を主張した。